

「弘庵」

弘庵

この茶室「弘庵」は、「如庵」「元庵」と異なり、有楽が設計したものではない。有楽苑の開苑から 10 年以上経った 1986 年に、中村昌生と京都伝統建築技術協会の設計で建てられたものである。建てられたものである。歴史ある 2 つの茶室は普段は立ち入り禁止だが、弘庵は有楽苑の呈茶サービスの会場となっており、定期的に 20 名までの大寄せ茶会が開催されている。

弘庵は、当時の名鉄社長・竹田弘太郎（1916-1991）にちなんで命名された。玄関に掲げられている扁額は、元庵の扁額を刻んだ人物の後継者である表千家 14 代家元、而妙斎（1938-）が制作したものである。

弘庵には二つの応接室がある。広間は 15 畳、約 24 平方メートルと、如庵のようなこじんまりした茶室と比べるとかなり広い。その中でも特筆すべきは、中央の大きな床の間の天井で、これは 8 世紀初頭の杉板を再利用したものである。

寄付は 8 畳（13 平方メートル）で、主に広間で行われるお茶会の待合室としても機能している。通常、寄付は茶会の場として使われないが、床の間や炉など、必要な設備は揃っている。寄付の床の間は、広間の床の間に比べて素朴な雰囲気がある。右側の柱は、赤松の丸太を皮付きのまま加工したもので、底には小さな楔が彫られている。この三角形の切り込みは、筍の形に似ていることから「筍面（たけのめん）」と呼ばれる装飾である。元庵の床の間にもこのようなものがある。

弘庵に続く道は、水琴窟と呼ばれる音響装置が隠された石の手水鉢を通る。手水鉢を囲む小石は埋められた陶製の壺を隠し、地中に空洞が作られている。柄杓で水を注ぐと、水滴が壺の中に落ち、まるで琴の音のように響く。